わこのみ
猫教通信

第５２号
平成十五年
（２００３）
７月１５日発行
（年４回発行）

一粒の麦

佛渕 健悟

芭蕉俳諧の魅力の一つは、様々な階層の生活者のいぶきを活写しているところにあるが、もの知りの大御所ともいうべき民俗学の柳田国男をして、「私は毎度この芭蕉の物を識っているのには驚く」（『木綿以前の話』）と言わしめているのは痛快である。

帷子は日〻にすさまじ鵙の聲　史邦
籾壱舛を稲のこき賃　はせを

鵙が鳴く頃になっても帷子（夏着）を着ていなければならぬことのやるせない風情を詠んだ発句に、脇では稲扱きに雇われて働く人のきびしい現実を付けている。

柳田の説によると、稲扱きは二本の扱箸で稲穂をしごいて籾を落とすという素朴なやり方が江戸の末まで続いていたらしい。これは寡婦や小児の仕事でもあったというが、のちにもっと能率のよい千把コキが普及し始め、これがゴケタオシやゴケナカセと呼ばれるようになるところに、寄る辺ない者の運命をまっさきに変えてしまう技術革新のもう一つの顔がある。

そのようなわけで、この発句の主人公は女性であろうと柳田は言う。どうだろうか。この三吟歌仙の第三は「蓼の穂に醤のかびをかき分て　岱水」（醤はなめ味噌）で、これもどこか女性の振る舞いのように感じられるのだが（今ならなめ味噌の世話をしたがる男性は多いだろうけれど）、そうなると発句の主人公を女性と決めて第三の転じにかなうのかどうか。

この辺りの鑑賞はそれとして、柳田が舌を巻く芭蕉が「物を識っている」というのは、知識のレベルだけでなく、他者の運命に共感する力についてこそ言えるところで、土芳ならずとも〝師は如何なる人ぞ〟の思いを禁じ得ないところである。多くの人が『七部集』を愛してやまない理由もここにあるのではないだろうか。三百年前の付合が、眼前するもののように立ち上がってくるというのはそれこそ芭蕉の幻術とも言いたいところであるが、同時に、自分の心がそのようなものに熱く感応することに、不思議の感に堪えない時がある。「てには（文法）は公界物（公共物）」（『宇陀法師』）という言葉を真似るなら、感じる心もまた公界の物で、これをこそ伝統というのではないだろうか。

明雅先生の下で連句を学び、実作を習って来たことの目的は、この伝統を生き生きと自分の裡に甦らせることであったと気づく時、個の呪縛が解ける心地がして、非常な満足を覚える。

現代の連句にも今様々な潮流が認められる。連句形式にも付合の態度にも、新しい考えが進んでいるようにも感じられる。それらの試みが、真に実を結ぶかどうかは、同時代のいぶきと生活者から目をそらさない強靭さを持ったポエジーたり得ているのかどうかにかかっていて、俳諧は現実の生活を見つめるところから出発し、又そこに戻ってくるしなやかさを失ってはならないと思う。

明雅先生の教えは、蕉風俳諧をまぎれなく同時代そして後世に伝えていくところにあると私自身は思いこんでいる。もう芭蕉でもあるまい、新しい詩は新しい革袋にではないのかと、これもまた真剣な声として聞こえてはいるが、俳諧俵口を解かずと言い残した芭蕉の宿題は何だったのか、そんなことにつらつら思いを馳せるのが今は面白く、蕉風を守り、蕉風に遊んでいるうちにも、いつかきっと素晴らしい才能が出現してくるかも知れないと夢想するのも楽しいのである。それも又私たちの〝作品〟には違いないのである。

貝母亭立机免状授与とその経緯

東　明雅

下鉢清子さんは昭和五十九年以来の連句のお仲間であり、それと共に私の生涯の俳句の師であった故草間時彦先生を中心とする江戸川医師会の「鵯の会」の一員として、ともに草間先生のやさしくまたきびしい指導を受けた仲間である。私は凡そ十年余りこの人たちに揉まれたお蔭で漸く俳句集一冊を公にする事が出来た。草間先生及び「鵯の会」の御恩は終生忘れぬところである。

その下鉢さんは、すぐ私の柏連句会に参加してこられたが、ちょうど私と同じ柏にお住まいのところから、次々に俳句の方の有力なお弟子さんを連句会にご紹介下さった。久保田庸子さん、梅田利子さんなどその頃からであり、お蔭で柏連句会は盛り上り、「柏連句会報」は百六十号を越し、その百六十三号は「貝母亭清子宗匠立机式」の特集号となっている。

二十余年下鉢さんとお付合して一番有難かった事は「猫蓑作品集」前後十三巻の編集・校正を有能なお弟子さんを総動員して実行されたことで、この三月最後の「猫蓑作品集XIII」の校正をもって来宅され、「立机して貝母亭と名乗りたい」と申し出があった時、一も二もなく賛成した次第である。

貝母亭清子宗匠

立机と柏連句会

貝母亭（ばいもてい）　清子

立机することがあるならば柏でと念願していたので、この度、東明雅先生よりお許しがあり、柏連句会主催の立机式が実現したことは何よりも嬉しく、先生ご夫妻をはじめ、運営に終始お力添え下さった久保田庸子、梅田利子の両氏、謡「烏帽子折」、吟舞「黒田武士」で盛り上げて下さった坂本孝子、吉藤とり子の両氏、ご参加の各位に厚く御礼申しあげる。折もよし我が家の貝母百合が見頃であったことも良い記念となった。

柏連句会は、明雅先生が信州大学を退官され、柏市にお住いを移された昭和五十五年に発足となった。この会は関東地方に於ける先生の連句活動のスタート地点、猫蓑会の母体であり、今日の連句隆盛に繋がった意義深い会であるという位置づけをすることが出来る。

私が明雅先生に初めてお目にかかったのは昭和五十八年、江戸川医師会内の「鵯（ひよ）の会」という俳句会。指導者は当時の俳人協会理事長でいられた草間時彦先生、その隣の席にお座りの方が東明雅先生と御紹介があった。この会は二次会が新小岩駅前の居酒屋でというコースで、呑むほどに食うほどに侃侃諤諤と、実に大らかな楽しい刻を過ごすのである。明雅先生と草間先生とはお互いが連句の師であり俳句の師であると仰った。以来帰路もご一緒させて頂き、船橋経由東武線で柏方面へと。これがご縁で柏連句会の連衆の一員に。

忘れられない参加第一回、俳句以外は無知な新入生を懇切丁寧にご指導下さったが、心はもう畏縮するばかりに刻が過ぎ、次は恋の句と促されて安心し「猫の恋」の俳句を出すと、人間の恋ですと教えられたこと。共に新入生の北見さとるさんの恋句、〈姑娘のちらりと見ゆる柳腰〉を、これは「見する」でしようと〈姑娘のちらりと見する柳腰〉と直されたこと、たった一字の違いで斯くも妖しき姿態の醸し出されるものかと驚嘆、それからは一語でも多く先生の言葉を聞きたい付味を知りたいと、万難を排して付いて回ることに。名桜や史跡を尋ねる旅や、ご夫妻のプライベイトに近い旅にもお供をさせて頂いた。車中の付回し、宿での句会、無言の教えも多く賜り、また新人を育てるとはこのようなものか

と悟らされ、指導の有り様にも開眼することが出来たのは、何と恵まれていたことかと。

宿に着くと発句勉強として二十句会、これはもう必死で、併し合評に入ると遠慮会釈なく御託を並べて。或る旅の句会中に先生がすっと小短冊を私の前に、拝見すると、

けちばかりつける女や藪虱

若輩の分際で申し訳ない、俳句的に考えてばかりと大いに反省しつつも、また次回では無礼なことを言ってしまう。そんな雰囲気の中で育てて下さって今年は二十年、数えてみると同時同場が九百回以上になるのである。

賜りました文台には

風光る玉子の黄味の濃くなりて　明雅

の御染筆。「鴨(ひよ)の会」の席上で草間先生が激賞された御句である。文台にお書き下さった意味の深さを思うとき、誠に有難く、益々この道の「玉子の黄味の濃く」なるようにと努めねばと。これからも藪虱はしっかりと裾にひっついて行こうと思う。

恩寵を畏みし日の花衣　清子

柏連句会の作品は毎月五十嵐譲介氏が冊子にして纏めて下さるようになり、立机当日の作品六巻は百六十三号となった。現在柏連句会の幹事役は武井雅子氏（明雅先生ご長女）、猫養会柏支部はその中にご一緒させて頂く形である。支部の幹事役は久保田庸子氏として運営されている。

祝立机　貝母亭清子宗匠

源心「ばいもの花」の巻

坂本　孝子　捌

卓の上ばいもの花と狸毛(たけ)筆　東　明雅
名香くゆる麗日の宴　坂本孝子
鼓笛隊揃ひの服に東風うけて　下鉢清子
ドミノ倒しで笑ふ馬跳び　和田順子
粗土(ウ)を泉に洗ふ農婦たち　荒川有史
ひまわり迷路照らす月影　河内　薫
追ひかけて追はれていつか寄り添ひぬ　順
成田離婚は猫が原因　史
海広し波を数へて日が暮れて　薫
自在に曲がるストローの首　清
善と悪オレが決めるとブッシュさん　薫
内なる荒野続くたたかひ　史
年の花恩寵いくつ重ね来し　清
編み直し着せ母のセーター　順
高々と人を嗤ふか寒鴉(ナオ)　雅
いよいよ尖る魔女の鈎鼻　順
ロゼワイングラスの向かう覗く夢　清
金魚の餌に掬ふぼうふら　史
御器噛のやうな妓に吸ひつかれ　雅
何も知らない若き大黒　同
カチンコが変身のときエキストラ　清
山の端洗ふ通り雨なり　孝
幾多郎の哲学の道月明く　雅
また買ひ足してつん読の秋　順

おく(ナウ)つきも実家(さと)も静かな冬隣　清
大八車の車アートに　薫
肩衣に許されませい花一枝　孝
照りてかげりてけふは暖か　薫

平成十五年四月十三日首尾
於　光ヶ丘近隣センター

立机祝句

卓の上ばいもの花と狸毛筆　東　明雅
荒起し貝母見事に開きけり　東　郁子
花爛漫根は八方に地を掴む　坂本孝子
咲き満ちて立机を祝ぐや花の舞ひ　内田麻子
なほ高く上りうたへや告天子　上月淳子
花鳥のこぞり寿ぐ立机かな　市野沢弘子
陽光のあまねくさして花大樹　原田千町
松柏の芽吹き楽しや石の鉢　豊田好敏
若みどり大き樹蔭を夢見けり　鈴木千惠子
手賀沼や初鮒重き竿の先　青木秀樹
清清と曙杉の芽ぶきかな　松島アンズ
俳諧の幸ふ町の穀雨かな　佛渕健悟
やはらかき春ははくりの花つけて　浅賀丁那
女の松の勁き優しさ風光る　久保田庸子
花満ちて立机の祝ひ華やかに　桑原美津
真っ赤な火育てて立机春の百合　吉村ゑみこ
わらんべにかこまれてゐる貝母かな　八代　嫋
北総にははくりの輪や春立机　鈴木美奈子
侘と寂淡きトーンの花貝母　武井雅子

第十七回　藤祭奉納正式俳諧

次第　　役割

一　席改め　　宗匠　原田　千町
二　席入り　　脇宗匠　橘　朱鷺子
三　配硯　　副宗匠　青木　秀樹
四　献花　　執筆　近藤　守男
五　執筆呼出し　　知司　峯田　政志
六　文台捌き　　副知司　日高　玲
七　俳諧興行　　座配　松本　碧
八　花前　　座見　佐古　英子
九　玉串奉奠　　花司　八代　嬬
十　花の句披露　　配硯　式田　恭子
十一　端作り　　配硯　鈴木千惠子
十二　吟声　　老長　豊田　好敏
十三　文台返し
十四　作品奉納
十五　納硯
十六　挨拶
十七　退席

平成十五年四月二十五日
於　江東区亀戸天神社

奉納　俳諧之連歌　二十韻

藤波や戦なき世の来たれかし　秀樹
亀の甲羅に止まる蝶々　好敏
春闌けてコンダクターのかろやかに　嬬
ステンドグラスに見入る幼子　政志
鯉月のかけらを拾ひたる　朱鷺子
物の音の澄む坂がちの街　丁那
お待たせと君の息には林檎の香　玲
ドッグ・カフェで忍び逢ふ仲　英子
問診票二つ三つの嘘を書き　碧
ころがる石に苔なほも生え　了斎
緑陰に憩ふ農夫の小昼どき　志世子
そっと取り出す冷のいっぱい　恭子
パンドラの箱の奥処にある希望　千惠子
大統領はファザコンと聞く　一郎
抱かれて兎のやうに眠る月　健悟
互ひの胸を夢のゆき交ふ　昌子
リニアカーテスト順調甲斐の峡　暁巳
智慧の輪さがす若き山僧　美奈子
花よ花よいろにも出でて散り行くよ　千町
ワンラウンド了へ楽し野遊　守男

藤祭奉納二十韻集

「昨夜の雨雫」　秋山　志世子　捌

藤房やきらりと昨夜の雨雫　志世子
囀りのなか集ふ人々　碧
風船を見上ぐる吾子の手を引きて　一郎
ポップコーンの匂ふ街角　達子
マンション（ウ）の窓を限なく望の月　たつみ
思ひつのりて鳴らすほほづき　碧
近松の死出の道行身に入みて　郎
最終便を告ぐる案内　み
ウイルスとヒトの戦ひ果てしなく　達
風邪引きねずみスリッパの中　々
裏（ナオ）木戸でばったり会った雪女郎　郎
大吉と出る恋のおみくじ　み
シャンパンとキャビアで祝ふ婚記念　世
月に飛び立つ茶羽ごきぶり　碧
甚平にかんかん帽の啖呵売　み
恐いものなし肥後のもっこす　達
極（ナウ）むれば諸礼停止の境に入り　郎
加齢ですよとたはやすく言ひ　碧
ジョッキーの掲ぐるカップ花吹雪　達
弥生山から望む弥生野　郎

連衆　松本碧　古賀一郎　篠原達子
山寺たつみ

「藤祭り」　上月　淳子　捌

拝殿に風吹き抜くる藤祭り　淳子
春を尽くして響く吟声　美奈子
団扇張るうからの集ひ賑やかに　路子
辛く煮しめた牛蒡蒟蒻　豊美
裏山も宅地造成夏の月　要子
燃えるこころを掻き立てる冷酒　実
触れたくて触れられたくて十七才　奈
いつの間にやらバリヤフリーに　路
イラク人のイラクのためのイラク也　奈
砂嵐巻く水涸れし谷　豊
狐火のちらりちらりと光をり　要
女の髪も薄くなるのね　路
シルバーのダンス教室もてる彼　実
軽々と抱く僕はバトラー　奈
月の下案山子は派手を競ふらん　豊
納屋の入口揺れる干柿　実
鍋奉行お国自慢のきりたんぽ　豊
ひとつ覚えの唄は追分　奈
止まると見えて流るる花筏　路
ふらここ漕げば透き通る空　要

連衆　鈴木美奈子　倉本路子　高橋豊美　山本要子　梅田實

「白藤や」　式田　恭子　捌

白藤や絵心てふを語り合ひ　恭子
太鼓の橋をくぐる雨鶯　忠史
甘辛く棒鱈を煮る母ならん　ふみ
フックに吊す皆の歯ブラシ　暁巳
故郷に送るお歳暮月の街　麻子
湯冷めするよと言葉やさしく　千寿子
遊んでもラストダンスは私だけ　み
内緒で飼った牡の黒猫　麻
高層の窓にくっきり富士の山　み
からからからと回る矢車　史
西日灼く参謀本部愚かしき　巳
一パーセントで当確が出る　史
漱石の孫と漫画のロンドン記　麻
跳人いつしか脇道に入り　史
新藁を背中に刺したおちゃっぴい　巳
月受けとめるふくよかな胸　み
古本に埋もれて囓る焼竹輪　千
軽トラックは荷台満杯　恭
教会の鐘の余韻に花散りぬ　千
六郷河原きそふ大凧　麻

連衆　内田麻子　島村暁巳　根津忠史　中村ふみ　紺野千寿子

「光降る」　鈴木　了斎　捌

藤房や墨東雨と光降る　了斎
心字の池に数珠子條々　真呂
のどかに山高帽の塵とりて　丁那
思はず落す赤いメモ帳　一恵
人を待つ梧桐の蔭の月の席　千晴
お化け屋敷で袖を放さず　未悠
蠍座の女上司は深情　呂
ピッコロを吹くやうに嘘つく　那
フセインに昨夜会ったよ赤坂で　悠
制御不能の改造車なり　晴
閑さうな顔を寄せぬる神の留守　恵
冬至蒟蒻ぷるぷると煮え　那
ことぎれる間際ひと声あほんだら　晴
多情の始末引きも切らざる　恵
月の舟ケーベンハウンの恋なりき＊　那
秋蛍飛ぶ流謫の宿　呂
水琴の音も鎮まりて風炉名残　呂
轆轤を回す胡麻塩の髭　悠
山裾に双樹の花を仰ぎ見つ　恵
牧牛の背に止まる春禽　晴

＊ケーベンハウン＝コペンハーゲン（デンマーク語）

連衆　木村真呂　浅賀丁那　山崎一恵　福永千晴　棚町未悠

「藤房に」　副島　久美子　捌

藤房に触れれば浄土風の中　久美子
てふてふの影映す池波　健悟
踏み足を替へるスキップ春闌けて　泉子
社内託児といふもあるらし　一枝
六本木汐留界隈月自慢　英子
夜這の星のすいと流れる　良彌
虫の音に聞き間違へしプロポーズ　悟
家裁調停粋な計らひ　英
世界中敵に廻したならず者　彌
大縄小縄潜る愉しさ　泉
花梛菜（はなやさい）溶かしチーズで召し上れ　枝
寝て物を書く髭の文豪　悟
縁の下鼠の家族棲みついて　泉
貴方の嬰ならいくらでも産む　英
月明に扇の秘画を開きたる　悟
はたた神来て村を一喝　泉
インタビュー人柄にじむゴジラ君　彌
酒は友達酒の友達　悟
飛花落花回り舞台に柝が響く　枝
セピヤ色なる写真あたたか　泉

連衆　佛渕健悟　青木泉子　西田一枝　佐古英子　佐藤良彌

「藤房の雫」　中野　昌子　捌

藤房の雫水輪（みなわ）のひろごりし　昌子
亀全天に春惜しむ頃　千惠子
風車とびだす絵本作りゐて　壽子
ぐるぐると塗るクレパスの青　啓子
スカールのオールの先に月砕け　好敏
天満祭に彼を探す眼　敬子
逞しき腕に強く抱かれたい　千
数字で解けぬメビュウスの帯　敏
楽聖の遺伝子情報高く売れ　啓
透かし彫にも上手下手あり　壽
初句会精進料理ととのへて　敬
寒炙（かんやいと）据う白き腿（ひかがみ）　敏
触れあへばショート寸前散る花火　壽
月ほどきゆく恋のしがらみ　啓
むしられた鵜の羽を栞にし　壽
古酒と新酒の夫々の味　千
脱北者悲しい過去を語りだす　啓
街から街へ旅のサーカス　千
浮かれ出たゴマフアザラシ花の雲　敬
欠伸しながら笑ふ山々　執筆

連衆　鈴木千惠子　杉山壽子　小池啓子　豊田好敏　須賀敬子

「学成らん」　生田目　常義　捌

学成らんまなざしあげよ藤祭　常義
親子連れ立つ春昼の橋　わこ
琴弾鳥練習曲に混じりゐて　朱鷺子
コーヒーの香の満つるリビング　政志
菩提寺へ峠越えゆく雪催（うな）　華蔵
すれ違ひたる夜回りに月　嫋
若女形人形振りに息を呑み　朱
あの娘好みの破れしジーパン　わ
ある時は脂肪を燃やす糖衣錠　嫋
誰か来たよと知らす愛犬　仝
夏蝶（なつ）をぼうつと見をり駐在さん　華
御輿連中西へ東へ　朱
ニューヨークゴジラの貌もなじみきて　仝
ＴＲＯＮ坂村爽やかさ佳し　政
蛾眉夫人この日この時待ち兼ねる　わ
金も愛をも捨てるやや寒　政
一城（なつ）を支へし沃野広がりて　華
釣竿かつぐ翁背高し　常
人生は須臾の夢ぞと花に酒　朱
光さす虹梁にまつはる　嫋

連衆　横山わこ　橋朱鷺子　峯田政志　山田華蔵　八代嫋

「面々の」　林　鐵男　捌

面々の雅におはす藤祭り　鐵男
はづむ会話と轉りの声　千町
春障子猫の出入りに明けおきて　やすこ
ハンバーガーが僕は大好き　裕美子
繰り返し月を揺らして逆上がり　弘子
じっと動かぬやせた蓑虫　秀樹
知らぬまに囮籠とはご無体な　や
すっかり狎れし肌の艶やか　弘
買ひ替へはハイブリッド車と決めてをり　町
坂東秩父西国の旅　裕
釜飯に別注文の心太　樹
漫画になって河童百態　町
ご寮さんしっかり者で器量良し　や
最愛ぢゃない俺のポジション　町
イヤリングことりと置いて冬の月　裕
湯婆抱いて日がなとろとろ　弘
教へ子の名前忘れる老教師　樹
競ふ早慶櫂を揃へて　鐵
風出でてゆさりと花の下枝かな　町
蝶舞ふ夢に酔ひて候　や

連衆　原田千町　池田やすこ　黒川裕美子　松原弘子　青木秀樹

「詩心いさむる」　日高　英二　捌

藤波や詩心いさむる大太鼓　英二
あっけらかんと鷺のレプリカ　利子
春ショールLANのシステム小器用に　ゆみを
喫煙場所へ向ふ早足　かりん
合作の箱庭にさす月の影　景翠
倅たよりにできぬ短夜　靖子
釣書に病歴なしと付けたして　ん
女将もこなす青い目の嫁　利
納豆にしんこ味噌汁なま卵　を
スローライフを起ち上げる村　ん
境内にちらほら仰ぐ冬桜　翠
神農祭に財布すらるる　利
茶碗酒酌みつつ膝にしなだれて　靖
めじょけねえとは惚れたってこと＊　ん
月の船劇画のやうな世を渡り　靖
薄の原に光るだんびら　二
また止る通勤電車冷じく　翠
ＯＦＦにしてても触れる携帯　ん
花に降られ安土城址を夢の間に　を
マラソンランナー陽炎の道　利
＊めじょけねえ＝かわいそう（山形弁）

連衆　梅田利子　青島ゆみを　登坂かりん　岩垂景翠　関口靖子

「哲学をする亀」　山田　美代子　捌

藤波や哲学をする亀の群　美代子
笙の音ひびき深みゆく春　庸子
卯思ひ思ひの絵を描きて　玲
右と左に別の靴履く　守男
ギヤマンの盃の月光プリズムに　弘子
ワンショルダーの涼しげな肌　珠枝
押しつけの見合ひだったが一目惚れ　弘
田舎教師と有機栽培　枝
谷川岳に慰霊碑寂と佇めり　庸
風に吹かるる鴉点々　弘
不景気にしばれし旅の役者達　玲
股火鉢する鬼のデカ長　男
ボディビル自慢の彼は甘党で　玲
別れの朝をかこつやや寒　男
月の河岸魚糶る声のいさぎよく　男
残る蝿にも五分の意地あり　庸
シスターと共に祈りし反戦を　枝
奇蹟の水はほどほどに効き　代
城石の毫も隙なし花吹雪　庸
腰をやすめる畑打ちの人　弘

連衆　久保田庸子　日高玲　近藤守男　市野沢弘子　花巻珠枝

発句

和田　順子　選

「短夜」

短夜や志ん朝偲ぶ藍微塵（あいみじん）
嬶嬶と小夜鳴き鳥や夜の短か
短夜やをんなと埋める虫食ひ算
短夜や六根の声麓村
短夜や古きミシンに差す油
短夜や供華も芥もメナム河
短夜や女の足に合せつゝ
短夜に絵硝子越しの光かな
短夜やさぐる団扇も手に触れず
短夜やふと訝しむ妻の黙
短夜や班女の艶な舞姿
明け易し五人一間のクラス会
短夜やまばたきもせず回遊魚
短夜に百里行軍十七歳
短夜や繋舟に澪かすかなる
短夜や吸い寄せられし磁力あり
筒抜けの隣家の算段明易し
短夜にペンライト振るライブかな

優秀

＊嬶嬶と小夜鳴き鳥や夜の短か　　アンズ

短夜は夏の季語。秋の夜長に対し、すぐに明けてしまう夏の夜を惜しむ気持ちが含まれます。明け易しも同じです。

小夜鳴き鳥はナイチンゲールのこと。ナイチンゲールを鶯と言う場合もあるようですが、厳密には違う種です。春ごろから朝夕綺麗な声で鳴きます。「一夜の宿をありがとうございました。」と挨拶の一句。どんな一日が始まるのか楽しみですね。

＊筒抜けの隣家の算段明け易し　　沙悟浄

落語の世界を覗いているようですね。「明易し」の季語が利いています。昔なら長屋、今では夏の開放的なベランダなどから、やりくり算段の声が聞こえ、ついつい明け方まで聞いてしまいました。庶民の日常生活が面白く出ています。

＊短夜にペンライトふるライブかな　わこ

野外のライブコンサートでしょうか。涼しい風が吹いてペンライトが波のように揺れて、夏の夜を楽しんでいます。高揚感のある余情が面白い一巻になりそうです。

佳作

＊短夜やまばたきもせず回遊魚　　美奈子
＊短夜に百里行軍十七歳　　未悠
＊短夜や繋舟に澪かすかなる　　了斎

惜しい句

＊短夜や志ん朝偲ぶ藍微塵（あいみじん）

「志ん朝偲ぶ藍微塵」は、時を得てしみじみとした挨拶になっていますが、「短夜」の季語が「偲ぶ」という気持ちに合わないのが残念です。季語の持つ心も生かしましょう。

＊短夜や供華も芥もメナム河

悠然と流れる大河メナム、供華も芥も巻き込んで暮れてはあける。とたいへん臨場感のある風景です。しかし、日本よりも赤道に近いタイランドでは、秋の夜長も夏の短夜もあまり意識できないのではないでしょうか。内容がいいので惜しい句。

「冷酒」

海峡の赤道祭の冷酒かな
冷酒や下戸は持参のマイグラス
割り切ったはずの二人の冷し酒
野舞台や太夫に欲しき冷し酒
冷酒や伸びて丸まる猫に似て
薀蓄を泳へて聴くや冷し酒
冷し酒宿坊灯す善光寺
冷し酒グラスに滲む葉影かな
漬物は御意にかなわず冷し酒
尻青き論議しばらく冷酒かな
冷酒くむ半被の背ナの紋所
冷用酒玻璃のセットの主亡く
品書にどぜう跳ねるや冷し酒
冷し酒アクアマリンの指輪して
かくや漬け冷酒（ひや）の旨さのいや増せり
冷酒のなんで日のある通りかな
張力の盛り上がりけり冷し酒
冷酒（ひや）買ふて行き先変る夜汽車かな
冷酒やそろばん店の賣じまひ

優秀

＊冷し酒グラスに滲む葉影かな　　常義

冷酒は、燗をしないでそのまま呑むお酒を指しますが、冷し酒は、氷などに浮かべて頂くお酒のようです。夏の床料理などでしょうか。辺りの緑がグラスに映って綺麗な句ですね。十分に情景を出しています。

＊品書にどぜう跳ねるや冷し酒　　美奈子

泥鰌は夏の季語ですが、これは品書の泥鰌ですから季重ねにはなりませんね。その場の雰囲気が良く出ていてお店への挨拶になりました。どぢやうでなく「どぜう」が江戸風。

＊冷し酒アクアマリンの指輪して　未悠

きれいな水色の貴石は、幸せを呼ぶと言われて人気があります。そういう事に敏感な現代女性でしょう。お洒落に冷し酒を呑んでいます。居合わせた女性への挨拶がいきいきと詠めています。

佳作

＊海峡の赤道祭の冷酒かな　　暁巳

赤道の緯度０線を越える時の祝宴。参加しておれば感動です。

＊漬物は御意にかなはず冷し酒　　鐵男

「御意にかなはず」がなかなか面白いのですが、一巻の広がりを狭めてしまうのでは。

＊冷酒（ひや）買ふて行き先変る夜汽車かな　沙悟浄

無頼ぶりが面白い一巻になりそうです。

発句の作り方

秋元　正江

連句にでかけるときは、実際はいらなくても嗜みとして発句を用意するように心掛けましょう。

次に会場には時間ぎりぎりにすべりこんだり遅刻をしないこと、早目に着いて周辺の自然に触れるゆとりが欲しいのです。

着く迄の気象、季語に心を深めて、柔軟でみずみずしい感性を保つことが必要でその心のたゆたいを切りとって発句に仕立てます。発句は挨拶だからといって、季語、切字を入れて事柄を説明したでけの安易な句にまとめないように気をつけましょう。花を詠んでも自分という人間の表現です。

教室で席題の選をするに当って、俳句として選ぶのか、発句として選ぶのかという質問がありました。それは勿論発句の条件をみたすものを選んで欲しいということに違いはありませんが、敢えて俳句としての芸術性にすぐれている句はそれを捨てさるべきではないと思います。佳い句を鑑賞することも実作の力をつけますし、その句のセンス、作り方を学ぶチャンスを失ってはならないのです。

発句は歌仙なら三十五句を引っぱっていく巻頭の句であり、発句と俳句は元は同じで俳句の作り方を知る必要があります。完全に独立して脇が付けられない俳句（つまり発句として成立しない）は、それを見分けるべきですが、逆に発句の条件をかたくなに狭い範囲にしてしまうと、発句は新しみのないありきたりのものになってしまいます。

発句の在り方を踏まえた上で、ことばは、曖昧なはっきりとした枠のない所に美があるのです。かわたれどきのような昼でも夜でもない天地の言霊が入れ替る一瞬のあわいをみつけ、歳時記と好きな句集を読んで下さい。

（元朝日カルチャー「連句入門」講師）

「季刊連句」四十五号（平成六年六月）より転載

次回兼題　小鳥来る・後の月
　　各題一句づつ一人二句まで。
講　評　和田　順子氏（絵硝子主宰）
　　佛渕　健悟氏（ＡＣＣ講師）
〆　切　八月末日
発　表　五十三号（十月十五日発行）
宛　先　〒１５５—００３３
　　世田谷区代田３－１９－８
　　Ｆａｘ03－5486－9751
　　日高　英二・玲

雅号での投句も結構です。
皆様のご参加をお待ち致しております。

桃径庵和子宗匠三回忌追善

平成十五年五月十八日
於　桃径庵　四の宮ブルー

追善発句

牡丹散りてはや二年か和子の忌　東　明雅
麻雀の面子揃ふや走り梅雨　青木秀樹
アベリヤの蕾みてをりぬ桃径庵　秋山志世子
とこしへの微笑や庵の白薔薇　浅賀丁那
夏草のしげりなつかし桃径庵　池田やすこ
目が覚めて部屋に漂ふ新茶かな　石原英一
二年の思ひ集ひて庭石菖　江守麻子
掛香や風の残せし忘れもの　大島洋子
師の笑みにほんのりとある薄暑かな　川名将義
一つ葉や二世の育つ三回忌　蒲原志げ子
きりとした和服姿や夏の雨　北村良輔
母の間の楠公父子や青葉風　古賀一郎
切絵図の町名残る夏柳　近藤守男
面影や女一代江戸切子　坂本孝子
黒衣着て三千世界を夏の蝶　佐古英子
星涼し筆西窓に置いたまま　式田恭子
花ざくろ母娘二代の俳諧師　島村暁巳
花なすの夕べ濃くなる桃径庵　杉山壽子
右肩でくるり回れば夏燕　鈴木美奈子
薫風の笑まへばそこに在ますかり　鈴木丁斎
しはしはと雨降る庭のダチュラかな　豊田好敏
野の道の一筋白しうすごろも　永島靖子
豆飯の円き握りの懐かしき　中野昌子
ひょいとまたうたた寝であれ若葉風　中林あや
蚕豆を真青に茹でて供すらん　中村ふみ
声明に泛ぶ面影青若葉　難波さえ子
押入に喋りたがってる古団扇　登坂かりん
夏帯の和子宗匠微笑めり　間佐紀子
薫風や女の意地の裏表　花巻珠枝
涼風に乗る御意見の江戸言葉　林　鐵男
佳き里や虞美人草も稀ならず　日高英二
受け継ぎし盃漲るや若葉風　日高　玲
藻の花に声あり縁の昼徳利　佛渕健悟
尋ねたき言葉あまたや思ひ草　松本　碧
師の逝く日あっけらかんと夏の青　村山加津枝
紫の烟湿らすついりかな　山口美恵
走り梅雨いさぎ良き人笑み残し　山田美代子
引き返すことは叶はず著莪の花　山本要子
春灯や式台ほのか猫の家　若林文伸

追善歌仙「二夏や」　式田　恭子　捌

二夏や母屋の広き縁に立つ　式田恭子
更衣して軽き手拍子　鈴木美奈子
ナビゲータースピード出せと指図して　林　鐵男
重ね弁当詰める煮卵　江守麻子
待宵は背丈の順に児が並び　石原英一
拝み太郎も控へをります　奈
パリコレのショー次々と冬隣　奈
後でこっそり渡すチョーカー　男
籐椅子に鎖骨ちらりと儚なげな　奈
鼓動は遠き海鳴りのやう　麻
若手しかメール打てない社内報　麻
ボーナス出よと月にお願ひ　奈
道のなき道の彼方に冬舘　奈
埃うっすら黒檀の卓　男
父さんに貰ったパジャマ裾を折り　男
鍵じゃらじゃらと錠にをさめる　恭
爛漫の花の下臥せ盃かかげ　麻
心字池行く春のパラソル　奈
シオサイト乾く残響弥生尽　奈
演劇集団越える国境　英
税関に渡り鴉を仰ぎ見て　男
法王庁に穴掘りに行く　男
縫箔を映す切子のきらきらと　奈
トランプ飛ばすマジックの種　男
家元は四人目の妻紹介し　恭
浮気はいつもおとなりの町　男
ベッドから真珠のピアス滑り落ち　英
なくした針がひょいと見つかる　男
夕月夜さんさしぐれの声の寂　恭
古酒の蘊蓄猫に聞かせる　男
言の葉の力信じて秋の筆　奈
人目忍んで貼る千社札　奈
盲牌にいたる雀歴五十年　英
煙草のけむり輪になって泛き　男
花便り雲に託さん空のはて　恭
受け継いでゆく雛の塗櫃　麻

平成十五年五月十八日　首尾
於　桃径庵　四の宮ブルー

四宮今昔

式田　恭子

「風鈴」の巻

風鈴をひねもす聞くや休刊日　明雅
藍深まりしあぢさゐの毬　靖子
面打師木屑の中に埋れて　隆志

「走り梅雨」の巻

走り梅雨太公望の腕を撫し　杉亭
薄紫にゆれる水草　和子
４ＷＧワックスかけし新車にて　進

昭和六十二年六月一日、四宮連句教室は荻窪と井荻の中間に位置した公民館に明雅先生をお迎えして、この二巻ではじまりました。

何年かたち、桃井の拙宅に場所が変わり、母は手料理で皆様をお迎えするようになりました。その最初の平成二年九月二十四日は大勢で三巻の興行です。

「秋麗ら」の巻

水浴びて雀機嫌や秋麗ら　明雅
辿る小路に曼珠沙華揺れ　政志
調律のグランドピアノ月待ちて　和子

真夏のような日が続いた二年前の五月、母は帰らぬ人になりました。残されたものは書きかけの原稿と、ワープロに保存されたＡＣＣの教材と連句と発句と・・・千代紙で表紙を作った膨大な数の連句帖。季寄せと白い短冊はいつもの鞄の中にありました。

母の連句帖には連句を始めてから亡くなる直前までのすべての作品が毛筆で書かれていました。時には写真入りで、その場の様子が手に取るよう。連句をしている時の母の楽しそうな顔…

長いような短いような二年がたちました。その間、四宮会は四の宮ブルーと名を変えて続けさせて頂いています。そのようにして皆様の一座に加えて頂くようになり、母の連句への情熱も愛も以前よりずっと分かるようになりました。母にとって連句は生き甲斐だったのだと改めて思いました。毎月の四宮会もどんなにか楽しみだったことでしょう。

現身に言の葉残し夏めぐる　恭子

三回忌はこの荻窪の家、桃径庵で皆様と連句をさせて頂くことができました。母が元気だったときと同じように。

母はいつも前の日には部屋の掃除をして、買い物にでかけました。帰って書き物をしながら、とろ火で煮物を始めます。電話で、「明日のおかずはな～に」ときくと、ふふっと嬉しそうに話してくれます。

当日早く起きた母は玄関から始まって前の道をせっせと掃きます。そしてきれいになったところへ水をぱーっと思いっきりよく…。

追善半歌仙「桃若葉」

膝送り

桃若葉角を曲がれば逢へさうな　了斎
とび出してくる高き打ち水　恭子
三尺の童子に沓を運ばせて　健悟
額の髪を風が振り分け　玲
月のぼる海に曳き出す漁舟　丁那
秋の恵みは樵の森から　加津枝
集ひ来るよか男らの村芝居　英二
にやにやせずに何か言ってよ　守男
鏡には蝮の裔が恋呆け　美恵
震度は４とニュース速報　佐紀子
友達に同時のメール打てません　恭
そっと捕へる霜の夜の鶴　斎
薬莢の零れて月の寒々と　玲
突堤の端立てるマネキン　悟
よみがへるアトムに託す夢あまた　枝
高田馬場に蝶を飼ふひと　那
吉祥天ふっとためいき花吹雪　男
おぼろおぼろに消えてゆく詩　恵

平成十五年五月十八日首尾
於　桃径庵　四の宮ブルー

皆様お集まり頂き本当に有り難うございました。母も喜んでいることと思います。

伊勢派散策1
立花北枝――元禄二年の十五日余

橘　朱鷺子

「季刊連句」創刊号に明雅先生は「先師芦丈翁の教えにまかせ、蕉風伊勢派の伝統を守り、その中で真の新しさを模索して行きたいと思う」と述べられている。

先生から賜った伝道書の十番目に我名を見出した時の喜びと感動は忘れられない。

蕉風伊勢派の末につながる者として、伊勢派の人々の面影を探って見たいと思う。

伊勢派は、伊勢山田の神官であった岩田涼兎、同じく御師であった中川乙由らによって成り、伊勢に地盤があったので伊勢派と呼ばれるが、伊勢一円とともに北陸にも大きく地盤を広げていた。伊勢神宮の御師によって広められたとも言われる。其角の江戸派に比べ、支考の美濃派と共に田舎蕉門と呼ばれたが、「軽み」の風を継承、平明軽妙な作風を主体に今日に至っている。

伊勢派の系図の筆頭にあげられるのは「山中問答」の立花北枝である（?～一七一八）。兄彦三郎牧童と共に、前田家御用の刀研を業とし、通称研屋源四郎、号は鳥（趙）翠台、寿夭軒。小松生れ。金沢貞門系であったが、元禄二年（一六八九）奥の細道行脚の芭蕉に入門、越前松岡まで同行した。

この年、七月十五日芭蕉は金沢に到着。曾良旅日記に「十七日翁源意庵へ遊」とあるのは北枝邸のことである。金沢市の、久保市乙剣宮の向って右隣が北枝宅跡と言われている。因みに筋向かいは泉鏡花が少年時代を過した家である。

金沢滞留中の翁は、土地の連衆に歓待され、連日のように俳諧興行があった。

四句「寝る迄の」　於　宮竹屋（宿）

寝る迄の名残也けり秋の蚊屋　小春
あたら月夜の庇さし切　芭蕉
初嵐山あるかたの烈しくて　曾良
江ぶちのり越ス水のささ魚　北枝

半歌仙「残暑暫」
七月二十日　於松玄庵斎藤一泉宅

残暑暫手毎にれうれ瓜茄子　芭蕉
みじかさまたで秋の日の影　一泉
月よりも行野の末に馬次て　左任

7ウ ふたつ家はわりなき中と縁組て　一泉
さざめ聞ゆる国の境目　芭蕉
糸かりて寝間に我ぬふ恋ごろも　北枝

北枝は素朴、恬淡とした人柄であったらしい。発句、付句にも素直な句が多い。

一田づつ行きめぐりてや水の音（続猿蓑）
かまきりや引きこぼしたる萩露（俳諧書留）
笠提て墓をめぐるや初しぐれ（去来抄）
柿の袈裟ゆすり直せや花の中（炭俵）
竈馬や顔に飛つくふくろ棚（続猿蓑）

翁に越路の蓑を贈りて
白露も末あら蓑の行衛かな（猿蓑）

この蓑は「幻住庵記」に「…越の菅蓑斗、枕の上の柱に懸けたり」と出ている。

元禄二年七月二十四日、翁と曾良は金沢を発ち、小松に向った。北枝も随伴する。

世吉「しほらしき」
七月二十五日　於　藤村鼓蟾宅

しほらしき名や小松ふく萩芒　翁
露を見しりて影うつす月　鼓蟾
躍のおとさびしき秋の数ならん　北枝

2ウ 乞食おこして物くはせける　曾良
蠦の行ては笠に落かへり　北枝
茶をもむ頃やいとど夏の日　翁
ゆふ雨のすず懸乾にやどりけり　斧卜
子をほめつつも難すこしいふ　枝

七月二十七日、多田八幡宮へ句を奉納、
あなむざんやな甲の下のきりぎりす　翁

幾秋か甲にきへぬ鬢の霜　　曾良
くさずりのうら珍しや秋の風　　北枝

同日山中温泉着。宿は泉屋久米之助方。

八月五日、病んだ曾良が先に出立する際の餞別の歌仙が「山中三吟」・「燕歌仙」と呼ばれ、「翁直し」の一巻として有名な「馬かりて」の巻である。翁の添削と評語を北枝が書留めたものが残されている。例えば四句目までの初案は、

馬かりて燕追行わかれかな　　北枝
花野に高き岩のまがりめ　　曾良
月はるる相撲に袴踏ぬぎて　　翁
鞘ばしりしを友のとめけり　　枝

であったが、翁は次のように直して治定している。

歌仙「馬かりて」

馬かりて燕追行わかれかな　　北枝
花野みだるる山の曲め　　曾良
月よしと相撲に袴踏ぬぎて　　翁
鞘ばしりしをやがてとめけり　　枝

2ウ
遊女四五人田舎わたらひ　　良
落書に恋しき君が名も有て　　翁
髪はそらねど魚くはぬなり　　枝

1オ
長閑さやしらら難波の貝づくし　　枝
銀の小鍋に出す芹焼　　良
手枕にしとねのほこり打払　　翁
うつくしかれとのぞく覆面　　枝
つぎ小袖薫売の古風なり　　翁

八月十日頃、越前松岡にて翁と別れる。

もの書きて扇子へぎ分る別哉　　翁
笑ふて霧にきほひ出ばや　　北枝

「蕉門俳風の俳道に志あらん人は、世上の得失是非に迷はず、鳥驚馬鹿の言語になづむべからず。天地を右にし、万物山川草木人倫の本情を忘れず、飛花落葉に遊ぶべし。その姿に遊ぶ時は、道古今に通じ不易の理を失はずして、流行の変にわたる。」と書き出される「山中問答」は、この十八日間程翁に随伴した北枝が翁の正風俳諧論を書留たものであり、付録の「付方自他伝」（註・「季刊連句6・7号に詳しい」は、その後三年工夫し翁に見て貰ったことが記されている。この刊行は天保九年（一八三八）と遅かったが、写本で伝えられ、転じ方の手引きとして大いに活用されていたようである。解り易く、合理的で、実作、鑑賞にも非常に役立つ。

北枝は「奥の細道菅菰抄」に「至って風流洒落なるものにて奇談人口に遺る」とあり、「俳家奇人伝」には、友人と毎夜酒盃を重ねたこと、盗人に入られた時も、家が焼失した時も自若としていたことなどがあげられている。自宅が焼失した折の句、

焼けにけりされども花は散りすまし

には、翁も元禄三年四月二十四日付けで、「されども焼けにけりの御秀作、かかる時に臨み、大丈夫感心。」の書簡を送っている。

元禄二年七月二十日には、翁に従い金沢郊外野田山の裾野を散策した。その折の、

翁にぞ蚊屋つり草を習ひける

には感激している北枝の心情がよく現れている。この心情を失わず、随伴した十五日余、翁の言葉に渾身を傾け、書留めたのであろう。この旅以後、再び翁に見えることは無かった。享保三年（一七一八）五月十二日没。金沢市山の上町、浄土宗心蓮社に「趙北枝先生」と刻まれた戸室石の立派な墓がある。

池の星又はらはらと時雨かな　　北枝
枯色深き四囲の山々　　朱鷺子

北枝の墓

実験室―合評―

参加者　坂本孝子　鈴木美奈子　鈴木了斎
日高英二　日高玲

歌仙「雨脚の」　三吟ファックス文音

雨脚のあるとしもなし春の土　鈴木了斎
まだ新しき苗札の文字　坂本孝子
魚島へ船出仕度は整ひて　日高玲
煙草の箱をさぐるポケット　了斎
カーテンに月さすクリーニング店　孝子
急ぐ客来る青北風の中　玲
檸檬（ウ）の実玻璃の螺旋に圧しつぶし　了斎
同人雑誌肺病みし頃　孝子
雑魚寝してやがてわりなき児を宿す　玲
聖母の色香消ゆることなし　了斎
この村のこの畑からこのワイン　孝子
灸の据ゑ場所そっと伝授す　玲
月影に光る首領の脂汗　了斎
謀叛知らせに走る短夜　孝子
転調のトリルをのばすフェルマータ　玲
疝気の筋は親ゆづりにて　了斎
長屋からどっと繰り出す花三分　孝子
蚕も虱もめかる蛙も　玲
滴（ナオ）らす前衛墨書空海忌　孝子
阿頼耶識から言の葉の泡　了斎
突っかけでヤク買ひにでる雪模様　玲
革ジャンパーに包む体臭　孝子
一代の騎士の称号許されて　了斎
御身ばかりを恋ひわたり候　玲
盲目の手を引かれつつ新枕　了斎
黄楊の琴柱よ秘曲洩らすな　了斎
ロケットのおもちゃは庭の池に落ち　玲
連続前転ひねるフィニッシュ　孝子
月今宵老いし忠治が見えをきり　玲
裸電球揺れて冷えゆく　了斎
牛丼（ナウ）を考へて喰ふ秋相場　了斎
古き実印念入りに捺す　了斎
新興の街にも馴染み太極拳　玲
チャットサイトの遠き友より　孝子
日のかけら花ともつれて散りやまず　了斎
幼きはやを放せせらぎ　玲
平成十五年二月十六日起首三月十六日満尾

英二　それでは始めましょうか。やり方としては大まかに四つの面を単位として捉え批評を進めては如何でしょうか。

了斎　明雅先生が、「批評の基準が五つ位ある。」とおっしゃっています。一つは、付味と三句目の転じが良いか。二つは式目にあっているかどうか。三は序破急。それから山場がよい場所に効果的に出来ているかどうか。最後は、詩情があるかどうか。いつも個々の連句への先生のご批評を読んでいると、やはりこの詩情の有無ということを一番大切にしていらっしゃるのではないかという気がします。

孝子　そうですね。

＊表

英二　それは最後に全体を振り返って見ることにするといいですね。では、まず発句ですが、最近の連句作品を見ますと発句に挨拶性が乏しいのです。発句は顔を連衆に向けて、何らかの挨拶が含まれていることが当然の事と思います。これから詩的世界に入ろうじゃないかという挨拶心が重要と思います。

孝子　この三人で文音は初めてでしたので、気負いがありすぎてもいけないし、失礼ですが、どうでもいいような立句でも困るのです。発句を頂いたこの日の、細雨が沁みとおる「春の土」の感触が、よい挨拶と感じました。

玲　初めて付合をする連衆への挨拶として情感細やかな発句でした。脇句は「新しき苗札」とその場の実景を添え、励ましと希望をこめて、発句の気分を受け入れています。お互いの挨拶心をさり気なく述べ合い、三吟を始める幸福感が広がりました。第三は景を転じ、気勢、野心の色を出してみました。

了斎　気合を入れてはじめようじゃないかという勢いが出ています。三句それぞれが挨拶になっている。

英二　「新しき苗札」「船出仕度」はポジティブな感じで映りあっていていいですね。

玲　月の句は打越の漁師とクリーニング店の人が、同じように仕事を終えて煙草をさぐる、ともとれ、些か観音開きですが、漁仕度の賑いから静かな景に転じました。新味ある月句で、郷愁を感じる景でした。淋しい情趣が月の本情と響き合います。

美奈子　この月の句は新鮮な印象を受けました。表では冒険しない、月は賞玩の月といった、やや

固定観念がある中で、この月は異色です。私は気に入りました。

了斎　それに、表の中で変に暴れてしまう句ではないです。「カーテン」、「クリーニング店」に隠されたリフレインもいいです。

孝子　人情は消して、夜の店のカーテンに月光を当ててみたのです。ただ、「ポケット」「クリーニング」「急ぐ客」は続くとも言えます。

＊裏

孝子　折立は前句の「客」でなく「青北風」の感覚に付けたのがよかったですね。「青北風」と「檸檬」は清涼感でぴったりと付いています。「色立」で、感覚的「移り」の付けでしょう。

玲　折立句は表現が斬新でした。

美奈子　折立の句、ここでは、なんといっても「玻璃の螺旋」がいいのですね。

孝子　折立の檸檬から梶井を連想しました。「雑魚寝…」はよい句で「聖母」へも流れがいいです。

了斎　貧乏な文学青年男女が寄り集まるとありがちなリアリティーを感じます。あわれがありますね。

玲　「雑魚寝」は生身の女性の現実的な側面を詠い「聖母」は女性性の持つ普遍的で神秘的なイメージが詠われています。女性の二面が詠われ男性の恋のテーマが出ました。「この村の…」は軽いリズムで前句から転じました。

英二　「同人…」はピシャリと巧みに付き、また次句へ恋句の流れは巧みです。「この村の…」の情景はよくわかります。「灸の…」は有心付で、「灸」を出すことで村の生活振り全体が鮮やかに出ました。

了斎　「謀反知らせに」は蕪村の「鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉」を思いだしました。

美奈子　「雑魚寝」から「この村の」までの三句と、「月影に」から「転調の」にいたる三句のわたりは、この一巻のなかで、一番光っている部分ですね。ドラマ性、勢いのよさ、ぞくぞくさせます。「鳥羽殿へ…」の連想までは思い至りませんでしたが、蕪村の句の物語性を想起させました。

英二　「灸」に月句は意表を突く巧みな付味で俳諧味充分。ドラマチックな場面が想像され人間の修羅の世界という、現代連句ではあまり詠われない面白いシーンが展開されました。

孝子　「転調の…」の句はよい会釈の働きをしていると思います。「トリル」から「疝気」の発想に俳諧味がありました。

英二　「転調の…」の付けは傑作だと思う。前句の切迫した映像に音楽を合わせた、一種の「響き付」でしょう。言うなれば場前のＢＧＭとも取れ、新らしみがあります。「フェルマータ」には俳諧味、滑稽味があります。「疝気の」は腹の中のトリルと言う事で面白いし巧いです。しかし、ウ六句目の「灸」に帰る感じがします。

美奈子　「伝授」と「親譲り」も帰りますね。

孝子　「伝授」「親譲り」の言葉の問題より、やはり「灸」「疝気」という古めかしい病体の近さが問題です。この面は二句目で肺も病んでいましたね。「疝気」から「長屋」「蚤」への流れは一巻の笑いどころです。

玲　そうですね。「疝気」からの三句は、勢いある早い流れで畳み込むように付けられています。「拍子」「響き」は連句の音楽性とも言えますが、ここはシンフォニーの楽章が終わるイメージです。

英二　花句「長屋の花見」は幾つかのドラマの映像が考えられ面白く庶民性が出ました。端句の蚤・虱・蛙は長屋住いの人達の暗喩でしょうか、すこし滑稽が強いようですが、一句位こういうのがあってもいいですね。

　ウラは全体としてとてもいい流れです。この巻の圧巻はここですね。面白いのができました。

＊名残の表

孝子　折端がたたみかけるように生類が出ましたので、ここでは釈教を出したくなりました。

了斎　ここの釈教はいいですね。それに、蚤虱が前衛墨書の墨が飛んだように見えるとも付きます。

玲　次に「阿頼耶識」が付きました。このあたり、衒学趣味とも思いますが珍しい題材です。連衆の側としては、ワクワクしながら付合を楽しんだ場所です。

了斎　言葉になる以前の言葉の種みたいなものがそこから出てくるというイメージで作りました。前衛芸術はそういう所を追求します。

孝子　いささか抽象的なので次ぎの句はリアルなものがいいと思い「突っかけ…」を選びました。

玲　次の「革ジャンパー」はよい付けでしたが、私の勝手な欲を言えば、もう一歩深い人情がここで出せればよかったとも思いました。悪いと知り

つつ衝動的にヤクを買いに行く現代人の、拠り所の無い哀れを詠えればと考えました。

了斎　そうすると重くなるでしょう。

美奈子　そうなると三句がらみになりそう。ナオに入って「前衛墨書」「阿頼耶識」「ヤク」「革ジャン」「騎士」と、やや体重がかかり過ぎていませんん？　ウラの花と折端のような滑稽な味が、ここでも発揮されていたら、とちょっと残念です。

玲　滑稽は大切な要素ですが、深刻なことを、軽く詠うということも可能です。そこに独創的な味わいや人間のおかしみ、哀れが出せれば、歌仙に厚みが出ると思います。

英二　折立の「前衛墨書」は墨書の字の形が蚤や虱の姿、形をしている、としかとれない。よく付いていますが常套的な付味というのが私の印象です。誤解かもしれませんが。次ぎの「阿頼耶識」は非常によく付いています。前衛墨書をする人たちは無意識層から上って来るようなエネルギーやインスピレーションに乗って書くのですから。ただ前衛墨書を書く作者の世界を詠っているとすると、打ち越しも字の形なので幾分障る感じです。ただし方向は随分転じています。三句目のヤク買う人も前衛アーチストと考えると打越しますが、「ヤクザ」ともとれますね。「革ジャンパー」の付けは人物像がよく出ていて見事です。

玲　「ヤク」の句は昨今、高校生やごく一般の人に覚醒剤汚染が広がっているという報道もあり、そのような現代風俗を「突っかけで」に暗示しようかと思いました。

次の句は騎士に見立て変えて気分を転じました。

了斎　イギリスにナイトの称号をもらったバイクレースのチャンピオンがいるので、「革ジャンパー」から思いつきました。いずれにせよ下層からの上昇気分ですね。

孝子　「恋ひわたり候」は前句に「位」が合います。ただ「御身」「盲目」「琴柱」では三句とも谷崎の世界と言われても否めないですね。ここの展開は意外性がありませんでした。

了斎　ウラの恋が梶井でナオは谷崎というのも気になります。

美奈子　「盲目の…」と「黄楊の…」の恋句は、いわゆる付き過ぎです。ある場合には、濃厚な恋の情を表す効果もあります。ただウラの恋が梶井にはじまる文学青年の恋、ナオは谷崎では安易ではないでしょうか。

英二　ここは三句がらみですね。「春琴抄」以外の面影ととればいいのでしょうが。何かありますかね。付味は非常に濃厚でいいと思います。前句の「御身…」は騎士道物語です。「黄楊の琴柱」はそのまま「春琴抄」にありますか？

了斎　いいえ。前句の「枕」から式子内親王の忍ぶ恋「わが恋はしる人もなしせく床の涙もらすな黄楊の小枕」を連想して小枕を琴柱に置き換えました。それと和泉式部の「枕だに知らねば言はじ見しままに君語るなよ春の夜の夢」の合成でしょうか。枕に秘密はつきもののようで安易と言えば安易かもしれません。

孝子　作者の発想としては確かに谷崎の「春琴抄」ですが、梶井も谷崎も句の中に固有名詞でだしている訳ではないので、次句の作者と読者の鑑賞にお任せするところです。極端に転じばかり重視すると情緒が壊れることもあります。

了斎　次の句では情緒を立ちきらないと。

英二　「ロケット」はそれまでの古典的な情趣ある世界を談林的に転換させました。少し談林風の茶化しもあるようです。「フィニッシュ」は機転が利いたウイッティーな句です。

孝子　次は前句を芝居小屋でトンボきっている人に見立てましたね。

玲　折端「裸電球」はよく移りました。鮮やかで印象に残る景の句です。

英二　月句は前句の若者たちの曲芸のような殺陣の中で年老いた忠治が見えをきっている景で、「老いし」が利き、田舎芝居の役者の哀れが出ました。「裸電球」で、客もまばらないささか侘しい芝居小屋の情景が出ました。

了斎　哀れが出ました。生涯忠治役をやっているのかもしれないな、と想像が働きます。

英二　ナオは総体的に見れば浪漫主義的な色調が強い感じです。空海、前衛墨書のアーチスト、革ジャンのビートルズ？騎士物語、春琴抄、国定忠治と文芸的な道具立てに寄掛かり過ぎです。尤もこれは一つのスタイルとも言えます。例えば「冬の日」の様式などはそうですね。濃厚な面白さが出ていて悪くないのですが、現代において連句を詠うのですから、現代生活の諸相を、切り取るようなことを考えて行く必要があると思います。面

影付けもあまり続くと辟易するところです。
　ウラは非常に現実的な面白いところがあり、ナオはロマンチシィズムの横溢という一つのスタイルとも考えられますのでそれも良いかと思います。
美奈子　あまり物語・演劇に依拠すると、作者の心が伝わっていかない絵空事になる危険性があるでしょう、特に恋句では。それと、新しみとかオリジナリティが乏しくなってしまうこともあると思います。

＊名残の裏

了斎　それで、ナウに「牛丼」が出たかとも。
孝子　ナウは軽いですね。「太極拳」から気分が明るく転じています。花句はお洒落な句です。初折の花句とは「どっと」違って、模範的な対照です。挙句「幼きはや」もきりっとしました。
英二　ナウ三句目「新興の…」下降旋律が上昇旋律に変わっていいです。「チャット…」は広がりがでました。花句は「遠き友」の句との付合で、一抹の寂しさを出しており佳い句です。

＊まとめ

英二　全巻通して多様な世態人情が詠まれて、明雅先生のおっしゃる世態人情風交詩が、かなり上質な形で完成していると思います。圧巻は裏の「檸檬」から「聖母」へのシーケンス、それから「炎」から「謀叛」「トリル」へのシーケンス。この辺が面白いです。ナオにいくと些か濃厚すぎて。
了斎　序破急はうまくできていると思います。ただ、同席しての付け合いではこれほど面白い句がギッシリとは出ないので、ちょっと面白すぎというところはたしかにあるかもしれません。
美奈子　文音（最近は電音ですか）、の良さと座の良さとがあります。文音では文芸的にレベルの高い句が揃うのは当然と言えます。座の場合には、そこにしか生まれない勢いとかダイナミズムが身上でしょう。
了斎　文音では全部剛速球のようになって逆に単調になりがちですが、この巻はやや剛速球続きであるにもかかわらず変化があって飽きないです。そこが独特の魅力といったら手前味噌に過ぎるでしょうか。
英二　五句ずつ作り、次ぎの人が治定するので、創造と批評が同時に行われ、かつ責任を持つと言う事になります。ですからコクのあるものが出来ます。
孝子　この歌仙を見直すとナオは殆ど人情句ですから、煮詰まってしまいます。やはり人情句と場の句の配置など配慮が必要です。
了斎　そうですね。さらっとした遣り句が入ると山場がもっと生きたと思います。ナオに入ってから、三人とも熱くなって見境が無くなった。でもその感じが面白い。
英二　絵の具をこれでもかこれでもかと塗りたくっている感じ。遣り句、叙景句の入れ方など構造上のことを意識しないと詩作品として完成は覚束無いです。ただ、大会の作品などをみると人情句の後にすぐ叙景句が付けられて、せっかくの人情の流れを切っている時が多いのです。
玲　人情句を続ける事はドラマのシーンを転ずることでもありますから難しいところです。その上そこに詩的情趣があるかと責められるとなると、やはり景の句に逃げたほうが楽なのです。連衆に連句への共通認識がないと方向に迷います。
孝子　月次で催される座で同じ顔ぶれで巻いていくと、この発想に対してはこのスタイルで…というようなあらかじめ手の内が分っているような付句が出されることがありますが、この度は何が出てくるか怖いような楽しみなような、新鮮な期待感がありました。そして毎回裏切られることなく満尾を迎えられたと思います。
英二　予想を外されて「うーん」と思うことが次ぎの飛躍を呼ぶのです。
了斎　私はいきなり「俳諧虎の穴」に放り込まれて、お二人の胸を借りて荒行をさせられたという感じで、予定調和をはかる余裕などありませんでしたが、お二人のおかげで、苦しみつつもとても楽しい体験でした。多少の問題はあっても、そういう面白さ、楽しさが一巻に滲み出ている気がして愛着を感じます。
一同　有難うございました。

「実験室―合評―」いかがでしたでしょうか。ここに載せたい作品をお寄せ下さい。批評の側をご希望の方も歓迎致します。今回の合評への批評もお待ちしております。また、他の企画案ある方も実験室のドアをノックしてみてください。

ねこみの通信編集

談話室

この度新しく編集委員になりました。宜しくお願い致します。この談話室を担当しますが、会員同志の交流をめざした開かれた窓として、ぜひ活用していただきたいと思います。お手紙・投稿などお待ちしております。

（鈴木美奈子）

先ずは寄せられたお手紙の紹介から

◆水壷さんのご逝去を知り悲しみに沈んでおります。にこやかなほほえみ、洒脱な俳諧味、芸術家として尊敬し、いつの日か新宿で浅酌をと約束しておりました。心からごめいふくを祈りあげます。五十一号からはある意味で、新生ねこみのですね。機関誌がないだけに「通信」がそれに代わるものかと思います。どうか層一層、向後のご発展を願ってやみません。

（加藤　K）

◆五十一号何度も読み返しました。ご丹精の味わいがじっくりと沁みています。関わったものとして、紙面への愛情が伝わります。

（佛渕健悟）

◆五十一号本当に充実して、しかも楽しさいっぱいでした。連句のエキスパートから初心者までの読者をカバーできるような、「外に向けても開いた」幅広い内容であったらいいのにと思います。

（鈴木了斎）

◆「実験室―合評―」のFax何度も有難うございました。今までは作品を捌き、首尾し校合するところまでで作業は終りでしたが、初めての合評は厳しくもよい勉強になりました。今後、連衆以外のメンバーのみによる批評会の計画も面白いかと思います。（坂本孝子）

◆この四月から多摩のローカルラジオ局「FM多摩」で毎週水曜日「連句いろはのい」という三十分番組を放送しています。「連句のPRとイタリアねたなら」と、放送の企画に、つい乗ってしまった。（家に来た局次長というのがハンサムだった。）目下、多摩市の連句の会「無名会」（おおたけんのすけ氏等）と小金井市の「栗の会」（近藤守男氏）のご協力を得て、連句の楽しみ方、作品の解説のほか、ラジオ史上初？表合せ実作の募吟や句会実況などいろいろ。ぜひご協力下さい。fm77，6mh。

（山口美恵）

◆**上田閑照著　「場所」　弘文堂**

―連句と「西田哲学」の意外な接点―

最近インターネットの「桃李百韻連歌」に参加して得た興味深い体験です。

百韻を捌かれた田中裕先生は上智大の哲学科の教授。講演会記録の「沈黙の声（連歌の場所論）」に、西田幾多郎の孫弟子にあたる上田閑照先生が、著書「場所」のなかで、西田哲学の基本的な考え方を敷衍して実に独創的な「連句論」を展開しているとの紹介がありました。また、この連句論は、米国加州大での学会で講演された折、欧米の学者に大きな感銘を与えたということです。

連句論は、著書のなかの「切字と季語、及び連句」で展開されておりますが、連句という独特な芸術形式に注目されて、言葉の問題、「交わり」という間主体、相互主体の問題、また本著の主題である二重世界および二重世界内共存在の観点から、示唆するものが非常に大きいと述べられております。

具体例の、「古池や」考（切字による非連続と連続）、十牛図との照応、座禅と出定なども分かりやすく、面白いと思いました。

たしかに連句の句と句の「間」とは不思議な世界ですが、そこが「限りなき開け」の場所であることは、実作のときに直観的に感得されているように思われます。

西田の言う「我は、我なくして、我なり」自己→脱自己→自己に返る、そして「我なくして」において他者と共であり、場所に「於いてあるもの」によって満たされている（無一物無尽蔵）というのも、連句の句と句の間という場所に立った自分においてみると、かなり納得がいきます。自己存在を無心にしていく、この自己否定は、芭蕉の「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」に通底してはいないでしょうか。最後に後期ハイデッガーの言葉を援用されたという極めつきのフレーズを…。〝連句は「死を能くし得るものたち」の世界遊戯と言える〟どうでしょう？

（鈴木美奈子）

事務局便り

◇猫蓑会十月例会・俳諧芭蕉忌

日時　平成十五年十月十五日（水）
　十一時半～十七時（受付開始十一時）
場所　芭蕉記念館
　江東区常盤一-六-三
　電話　０３（３６３１）１４４８

・俳諧芭蕉忌正式俳諧終了後、席を分けて二十韻興行。

◇猫蓑会新会員

山口　元子、竹内　たつ子

◇猫蓑会運営委員

猫蓑会の各部門を担当する理事を補佐し、運営を円滑に行うため、次の方々に運営委員をお願いしました。

事務局担当　生田目常義
会計担当　山本　要子
作品集担当　久保田庸子
猫蓑通信担当　日高　玲・鈴木　美奈子
連句教室担当　鈴木　千惠子

◇猫蓑会平成十五年度当番幹事

式田　恭子、井上　鶴鳴、難波さえ子、松原　弘子、梅田　實
（任期は総会終了後、次回総会まで）

◇猫蓑会名簿

平成十五年度の猫蓑会名簿を配布します。住所変更や訂正が必要な場合は、事務局（松本　碧）までご連絡ください。
電話　０４５（５４４）６７７０

◇『猫蓑作品集１３号』完成

一冊二千円。部数に限りがありますのでお早めにお申し込みください。
〒２７７―００５１
柏市加賀二-十二-十一　梅田利子
電話　０４７（１７２）８１１９

◇平成十五年度正式俳諧・配役決定

宗匠　原田　千町
脇宗匠　佛渕　健悟
副宗匠　島村　暁巳
執筆　八代　嫋
知司　鈴木　了斎
副知司　林　鐵男
座配　秋山　志世子
座見　池田　やすこ
花司　中野　昌子
香元　鈴木　美奈子
配硯　鈴木　千惠子
〃　式田　恭子
〃　山本　要子
老長　上月　淳子
（実技指導：臥猫庵原田千町宗匠）

◇会費納入のお願い

猫蓑会の平成十五年度年会費の納入をお願いします。例会に出席できない方は左記の口座に二千円をお振込みください。

猫蓑会
　みずほ銀行　新宿新都心支店
　普通預金　３３７６０８８

◇猫蓑発展基金にご協力有難うございました。

鈴木　春山洞様　一万円
天の川連句会様一万八千円
緒方　健様　一万円

猫蓑発展基金
　みずほ銀行新宿新都心支店
　普通預金　３３７６０４５

季語の風景 8

佛渕 健悟

梅雨の季節である。駅まで濡れてつらい、黴くさくなる、洗濯物が乾かない・・・と早く通り過ぎてくれるのを願う梅雨ではあるが、こんな気分を救ってくれるのも又この季節の草花である。

仲夏の花には、クチナシ、柘榴の花、花菖蒲、十薬、南瓜の花・・とそれぞれ特徴のある花があるが、何と言っても筆頭にあげたいのはアジサイである。

アジサイの花言葉は、「高慢」「移り気」「美しいが香も実もない」。わざわざ女性に送るような花ではないかも知れない。それだけでなく、どうもアジサイは日本原産とされながら、余り愛されては来なかったという感じがするのはどうしてだろうか。

悪月と言われる梅雨時に連想が重なること。湿地を好むこと。色変わりする花であること。それから、草冠に便所の便と書いてこれもアジサイと読ませるのは、葉っぱをトイレの紙代りに使った証であるし、こんなのもイメージを暗くしているのだろう。何より、初めから、アジサイが現在の派手な手毬型（セイヨウアジサイ）だったらどうだったろう。

このアジサイを紫陽花と書くことの〝間違い〟を牧野富太郎はしきりに説いている。紫陽花の語は白楽天の詩の一節にあって、「山中に、紫色の、気香しき、芳麗なる木の花」があり、これを紫陽花と名付けるとあるが、それは今のアジサイとは関係ない花である。にもかかわらず、源順が『和名類聚鈔』でアジサイの漢名に「紫陽花」を当ててしまったのが口惜しい、と嘆く。

しかしそういう食い違いはあったにしても、アジサイに紫陽花の語をもって来たのはなかなかのセンスのように思う。芭蕉の発句「紫陽花や藪を小庭の別座鋪」にもこの語があるが、これが「あぢさゐ」では一座のときめきは半減するのではないか。

もう一つ、アジサイについて牧野博士が大変不機嫌だったのは例の「オタクサ」がある。シーボルトの編集した「日本植物誌」（フローラ・ヤポニカ）中のアジサイの学名「ハイドランジア・オタクサ」の「オタクサ」とは何か、長らく謎であった。そのうちに長崎でシーボルトと暮らした遊女の其扇（楠本滝）、〝お滝さん〟であることが判明した時、牧野博士は「シーボルトはアジサイの和名を勝手に変更し、女郎の名をこれに用いて花の神聖を涜した」と憤慨した。

その牧野博士も愛妻の名を笹の新種に「スエコザサ」と使っているのである。土佐のいごっそうは愛にも筋目を通したかったのであろう。

現在の植物図鑑から「オタクサ」の名はすっと消えている。

編集後記

日高英二

○編集長辞任の弁

小生、このたび「猫養通信」の編集長を辞任させていただくことになりました。前々から考えていたことですが、老齢の性で聴覚が鈍くなり、電話連絡その他編集上の折衝などに齟齬を来たすことも多くなりましたので、そろそろ引き際であろうと決断させて頂きました。今後は日高玲に編集長を引継いで貰い、小生は一編集アシスタントとして協力して行く所存です。

○あると思っていた砦が突然消え去り、矢面に出てしまったような心境ですが、今後は新メンバー鈴木美奈子さんも加わり、三人で編集を担当して参ります。引き続き、会員の皆様と共に楽しい誌面を作って行きたいと存知ます。何卒よろしくお願い申し上げます。（玲）

季刊「ねこみの通信」第五十二号
発行者　猫養連句会
編集人　日高英二　日高玲
鈴木美奈子
世田谷区代田三―十九―八
〒155―0033
印刷所　アート工業株式会社